

二〇二三年度 光塩女子学院中等科【第二回】

国語入試問題

二〇二三年二月一日（木）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

矢島大穴(ダイアナ)は自分の名前が嫌で仕方がない。小学三年生になり、クラスの自己紹介の時間を暗い気持ちで迎えていた。

とうとう、自己紹介の順番が来た。ダイアナは A 立ち上がった。教室中の視線がこちらに集まるのがわかる。根元が黒くなり始めてパサパサした金髪頭、くだらないアニメのTシャツ、とがった顎、やせっぽちの薄い体。自分でも嫌になるくらい鋭く大きな目に、皆が好奇のまなざしを向けている。

「矢島ダイアナです。本を読むのが好きです」

出来るだけ小さな声で言い、すぐさま椅子に腰を下ろす。周囲と目を合わさないように膝小僧を見つめた。皆がひそひそ話しているのがわかる。

「ダイアナだって！ あの子、外国の子？」

「違うよ。私、二年の時一緒だったけど、日本人だよ。確か、公園の近くのアパートにお母さんと二人で住んでるの」

「へえ、でも、髪が金色だよ」

「あれ、根っこは黒いじゃん。へんなの」

「染めたのかな？ 子供がそういうことしていいの？」

「お調子者らしい男子が右手を耳につけてぴんと伸ばした。」

「ねー、ダイアナってどういう字書くの？ カタカナ？」

「……大きい穴」

① 消え入るような声でつぶやくと、どつと笑いが起きた。

「はい、皆さん、静かになさい」

新しい担任の岩田敦子先生がきつぱりとした口調でそう言うと、教室は一瞬で静まった。色白でつぶりした四十代くらいの女の先生で、② 縁なしの眼鏡の奥に鋭い目が光る。とても怖いけれど、一人ひとりと熱心に接してくれるから生徒に人気がある。

「質問は今じゃなくて、休み時間にしましょう。新しいお友達と仲良くなるチャンスですよ。…矢島さんは本がとっても好きなの

よね」

突然話しかけられ、ダイアナはおそろる顔を上げた。

「一年生の時も二年生の時も、図書室をたくさん利用した人に贈られる『たくさん借りましたで賞』を受賞してますね。たくさん本を読むのはとてもいいことです。みんな、矢島さんを見習って図書室をどんどん利用しましょう」

はい、と元気のよい声が響く。ダイアナの名前のことは忘れてしまったようで、ほっと1を撫で下ろす。岩田先生が自分のことを知っているなんて考えてもみなかった。ダイアナは先生のことともうすっかり好きになっていた。先生なら二年生の時の担任みたいな頭ごなしに叱りつけたり、「乱暴で育ちの悪い子」と決めつけたり、ティアラを悪く言ったりもしないだろう。ほうれん草や魚など、給食で出る普段食べ慣れないものを残したつて、怒らないかもしれない。もともともと本を借りて、先生に褒められたい。

休み時間になっても③胸のどきどきを抑えられずにいると、ピンク色のカーディガンを羽織り、髪を（あ）アみ込みにした女の子が、ダイアナのところへ B やつてきた。

「ねえ、その髪の毛、どうしたの？自分で染めたの？」

気の強そうな味噌っ歯が唇から覗き、探るような目で尋ねられた。

「ううん……。ティ……。ええと、お母さんが」

「へえ、うちのママが言つてた。子供のうちに髪を染めたり、脱色すると、健康によくはないんだつて。大きくなれないらしいよ？矢島さんのお母さんつて変わつてるんだね」

訳知り顔で、周囲に聞かせるように声を張り上げる。何人かの女の子が振り返つて C とこちらを見ている。出会つて間もないのにどうしてこちらを攻撃するような真似をするのだろう。恐れる気持ちを堪え、上目遣いで観察していると、味噌っ歯はおびえたような色を浮かべた。みんなそうだ。話しかけてきたのはそっちのくせに、ダイアナが見つめ返すと、大抵の子供は怖がつて先に目を逸らす。

「なに、その目。にらむことないじゃない！」

にらんだつもりなんてない。びっくりして何か言い返そうとしても言葉が出て来ない。

「私、なんにも悪いことなんて言っていないじゃない。なによ、ダイアナなんて変な名前のくせに。あんたのママ、おかしいよ！」
味噌^{みそ}っ歯^はの X。ティアラは確かにおかしい。どうして普通^{ふつう}のお母さんのようになれないのか。わざわざ指^{して}摘^きされなくても、ダイアナはいつもため息をつきたいような思いで生きている。どうしてみんなはダイアナを放^{はな}つておいてくれないのだろう。自分が人を不快にする存在^{そんざい}だということくらい、よくわかっている。好かれようなんて思^{おも}つてない。ただ、静かに過^{すご}せればそれでいいのに。

「ダイアナは変な名前じゃないわよ。みかげちゃん」

すつと胸がさわやかになるような、よく通る声^{こゑ}がした。振り向くと、真^まつ黒^{くろ}なおかつ頭の女の子がにこにこしていた。真^まつ先に、綺麗^{きれい}な子^こだ、と思^{おも}つた。華^{はな}やかな顔立ちではないが、目鼻^{めびな}だちが(い)トトノつている。陶器^{とうき}人形^{にんぎょう}のようになめらかな肌^{はだ}、形^{かたち}のよい広い額^{かぶ}はいかにも頭^{あたま}が良さそうで、髪^{かみ}はお習字^{おひょうじ}の墨^{すみ}のように黒々とつやがある。着^きているものは地味^{ぢみ}なブラウスと紺^{こん}色のスカート^{スカート}だけど、パリツとしていて(う)セイケツな印象^{いんげう}だ。明らかに、他の子^ことは何^{なに}かが違^{ちが}う。

『『赤毛^{あかぬい}のアン』って知^しってる？ アン^{アン}の親友^{おんなじ}はダイアナ^{ダイアナ}って言うんだよ』

④わあ……。ダイアナは目を丸くする。『赤毛^{あかぬい}のアン』はほとんどベストワンと言^いつてもいいくらい、大好きな一冊^{いっさつ}だ。暗記^{あんき}するくらい何^{なん}度も読み返^{かえ}している。アンというおしやべりで(え)クウソウ好きな女の子が好^すきでたまらなかつたし、いちご水^{みづ}やパフスリーブ、ハートのキャンデイなど可愛^{かわい}いものや美味^{おい}しそうなものに満ちている。ダイアナはアン^{アン}の自慢^{じまん}の美しい親友^{おんなじ}で、どんな時^{とき}でも心^{こゝろ}が通^とじ合^あっている二人^{ふたり}の関係^{かんけい}がうらやましかつた。こんな風^{ふう}に本^{ほん}の話^{はなし}を誰^{だれ}かと出来るなんて……。みかげちゃん、と呼ば^よれた味噌^{みそ}っ歯^ははなんだかつまらなそうに②をすくめた。

「知らない。私、本^{ほん}なんて読^よまないもん。彩子^{あやこ}ちゃんと違^{ちが}つてね。ママは読^よめ読^よめうるさいけど」

みかげちゃん、とやはらはどうやら彩子^{あやこ}ちゃんに一目^{ひとめ}置^おいているらしい。たしなめられた時に、ひどく傷^や付^やいた顔^{かほ}をした。彩子^{あやこ}ちゃんという女の子にはおしとやかに見^みえて、周^{まわ}りの人^{ひと}をぐつと納^な得^{とく}させてしまうような芯^{こゝろ}の強^{つよ}さが感^かじられた。

「もつたいない。とつても面^{おも}白^{しろ}いんだよ。ああ、ダイアナなんて名^な前で羨^{うらや}ましいなあ」

女の子はこちらをまっすぐに見^みつめると、にっこり微笑^{ほほえ}んだ。素直^{すなは}でまっすぐでぴかぴかで、友達^{ともだち}になりたいとどんな子^こでも思^{おも}うようなそんな笑顔^{えんご}だった。育^{そだ}ちがいい、とはこういうことを言う^いうのかもしれない。

——あなたは育ちが良くないから……。

二年生の担任に投げつけられた暴言がよみがえった。

「私は神崎彩子っていうの。子がつく名前なんてめずらしいでしょ。おばあさんみたい」

味噌っ歯が行ってしまったと、彼女ははにかみながらそう名乗った。ダイアナはやつとのことで③を横に振る。おばあさんだなんてとんでもない。神崎彩子——うっとりするくらい素敵な名前だ。きつとお父さんとお母さんが心を込めて名付けたのだろう。

「私、一年生の時からあなたのこと知ってるの。中央図書館を使ってるでしょ」

「う、うん」

「私、何度もあなたのこと見てるよ。中央図書館でも貸し出しの数が多くて、ロビーのところに表彰状が飾ってあったでしょ。パパがね、すっごく褒めてた。いっつも鞆にたくさん本を詰めて、あなたが一人で借りたり返したりしてるところを私達、何度か見たのよ。あんなにたくさん本を読むなんて偉いねえって。岩田先生も言ってたけど、ダイアナちゃん、すごいね。私、同じクラスになれて、とつても嬉しい」

まさか、自分の姿が誰かの目に留まってるなんて考えたこともなかった。この子と仲良くなりたいたい。心の中で何かが静かに震え出す。彩子ちゃんと仲良くなったら、途方もなく楽しい毎日が始まる気がした。彼女を取り巻く穏やかで澄んだ空気にどうしようもなく惹かれる。このチャンス逃したくない。彼女ならきつと自分を分かってくれる。腹の底に力を込めた。アンにジョー、パッティにロツテにエリザベス。物語のヒロインはいつだって勇敢で、自分から人と繋がることを恐れない。⑤ああ、みんな、私に力をちょうだい。

「ねえ、あのよければ……。学校が終わったら、中央図書館に行くの。返却が今日までなんだ。一緒に……行かない？」

彩子は大きく目を見開いた。綺麗な顔にやさしい微笑が広がっていくのを、ダイアナは息を詰めて見つめた。カーテンが風にふくらみ、ふんわりと二人を包み込む。教室の喧騒が一瞬遠のき、世界はダイアナと彩子だけのものになった。春が始まったばかりの、しんと冷たくて、それなのに日向くさい風が頬をなでた。

(柚木麻子『本屋さんのダイアナ』(新潮文庫刊)による)

※注 ティアラ：ダイアナの母。ティアラという名前が気に入っており、ダイアナにもそう呼ばせている。

味噌っ歯：子どもなどの欠けて黒くなった歯。喧騒：人の声や物音で騒がしいこと。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) (あ) (い) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) アミ (い) トトノつて (う) セイケツ (え) クウソウ

(2) 本文中の [1] と [3] にあてはまる、体の一部をあらわす語を次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(同じものを二度使うことはできません)

ア 肩 (かた) イ 首 ウ 腕 (うで) エ 口 オ 胸 カ 耳

(3) 本文中の [A] と [C] に最もよくあてはまる言葉を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(同じものを二度使うことはできません)

ア ゆらゆら イ しぶしぶ ウ つかつか エ じろじろ オ このこ

問二 —— ① 「消え入るような声でつぶやく」のは、ダイアナのどのような気持ちの表れですか。説明した次の文章の空欄に入る

一語を自分で考えてうめなさい。

・自分が嫌だと思っている名前を言わなければいけないことに対する ()。

問三 —— ② 「縁なしの眼鏡の奥に鋭い目が光る」とありますが、この時の岩田先生の様子として最もふさわしいものを次の

ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 面白がる生徒たちに目を配りながら、場をなんとか収めようと焦っている。

イ 面白がる生徒たちをにらみつけて、ダイアナをかばおうと必死になっている。

ウ 面白がる生徒たちを厳しい視線で制し、興味本位の質問が出ないようにしている。

エ 面白がる生徒たちを見渡しながら生徒の様子を確認し、次に言うことを考えている。

問四 —— ③ 「胸のどきどき」とありますが、ダイアナはなぜ胸のどきどきを感じたのですか。一行以内で説明しなさい。

問五 本文中の X にあてはまる言葉を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 言う通りだった イ 言うのはおかしい ウ 言うのは不思議だ エ 言うことがわからない

問六 ④「わあ——。ダイアナは目を丸くする」とありますが、このときのダイアナの気持ちはどのようなものですか。説明しなさい。

問七 ダイアナから見た彩子の持つ性格を端的に表した部分を含む一文を——④より後から抜き出し、最初の八字を書きなさい。

問八 ⑤「ああ、みんな、私に力をちょうだい」とダイアナが物語のヒロインに願うのはなぜですか。説明しなさい。

問九 本文の内容について述べたものとしてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 岩田先生も彩子も読書家のダイアナに注目していたことに、ダイアナは驚きを感じている。

イ 彩子は『赤毛のアン』の登場人物と同じ名を持つダイアナと知り合えたことをうれしく思っている。

ウ みかげはダイアナのおかしさを強調することでダイアナと彩子の仲に割って入ろうとしている。

エ 彩子とダイアナは相手の名前を自分の名前と比べて素敵だとお互いにうらやましく思っている。

オ ダイアナは自分を認め、かばってくれる彩子や岩田先生と出会い、徐々に気持ちが明るくなっている。

問十 「彩子は大きく目を見開いた。くそれなのに日向くさい風が頬をなでた」の表現について述べた、次の文章の空欄をうめなさい。なお、(1)は選択肢から選んで記号で答え、(2)は二字の熟語を考えて書くこと。

・ダイアナは(1)ア 安心 イ 用心 ウ 緊張 エ 興奮)しながら、自分の誘いの答えを待った。驚きながらもみるみる微笑が広がっていく彩子の様子に、彩子がダイアナの誘いを受け入れたことがうかがえる。騒がしいはずの教室に二人だけの世界が作られ、新しい友達との友情が深まっていくことへの(2)を春の訪れのなかで感じている。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本ではよく、「若者はもつと個性を（あ）ハツキすべきだ」とか、「個性を磨くべきだ」などと言われます。けれど私は、そういう言葉にはあまり意味がないと思っています。

また、日本では「個性」という言葉が主に人の（い）カイカンに関して使われることにも、私は違和感を持っています。たとえば、「個性的なファッション、個性的なヘアスタイル」は、「人がアツと驚くような奇抜なスタイル」であることが多いでしょう。あるいは、他の誰も持っていないような特殊なスキルを持つことが個性的であること、この条件のように受け取られていますね。

このように考えると、①「個性＝人より目立つこと」と、多くの人が錯覚しているのではないかと思えます。

でも、根本的なことを言ってしまうえば、この世に生まれた人間は一人残らず全員、それぞれの個性を持っています。だから、誰かに「磨きなさい」と命令されて、義務のように磨く必要などないのです。

あなたが生まれ持った個性は、明らかにあなただけのものです。世界中に、あなたと同じ個性を持つ人など誰一人としていないのですから、「他の人はどうかな？」とキョロキョロすることは不要だし、他人の真似をする必要もありません。真似しようとしても真似できないのが、個性というものなのです。

あなた自身が「楽しい、面白い、不思議だ、ワクワクする、ドキドキする」と感じ、心から求めているものを優先すれば、それでいいのです。「磨く」とか「ハツキする」などと意識しなくても、自分が本当に好きなもの、興味があることに気持ちが向かっていけば、自分の世界がどんどん広がっていく。それが本当の意味で「個性を磨く」ということです。

いちばん良くないのは、親や先生の顔色をうかがったり、友達の反応を気にしたり、世間の思惑に振り回されたりしながら、「個性を磨かなきゃいけない」と無理をすることです。

そのうちに自分の軸足をどこに置いていいかわからなくなり、②自自力が失われ、結局は自分で自分の個性をつぶしてしまうことになりかねません。そういうネガティブなサイクルに入らないよう、気をつけてください。

みなさんは、「アイデンティティ (identity)」という言葉をご存知ですね？ 英和辞典には、「同一性、身元、正体」などと出ています。

この言葉は、心理学では「自我同一性」と訳されています。一般的な言い方をすれば、「自分のことを、他の誰でもない自分だと認識すること」という意味で、「自己認識」とか「独自性」などとも言われることもあります。

たとえば、クラスの中にあなたと同姓同名の人がいるとします。当然のことですが、その人とあなたとは別々の人格を持つ別々の人間です。同姓同名の人が何人いようと、③あなたという「個」は一人しかいません。

このように、「自分と完全に同じ人間はいない。自分は、この世にたった一人の存在だ」と認識する時の基礎になるのが、アイデンティティという概念です。

(中略)

アイデンティティの確立というと、すぐくハードルが高いことのように思うかもしれませんが、決して難しいことではありません。それは、「自分の頭でものを考えることが、いつでも、どこでもできる」ということなのです。

たとえば、今日あなたが学校帰りに飲んだドリンクも、図書館で借りてきた小説も、④自分で決断して選んだのだから、あなたのアイデンティティの一部です。

休日の過ごし方、家族との関わり合い方、友人との付き合い方なども、すべて自分のアイデンティティを形成する要素です。そう考えれば、アイデンティティの見極めや確立が特別に難しいことではないとわかるでしょう。

(中略)

私が小学生の頃の同級生に、足の速いY君という子がいました。

Y君は毎年、運動会の一〇〇メートル競走で一等になり、賞品のノートや鉛筆を山ほどもらっていました。私も足は速い方でしたが、このY君にはかなわなくて、運動会のために、「いいなあ、すごいなあ」と思っていました。

賞品のノートや鉛筆がほしかったわけでも、自分より足の速いY君にジェラシーを感じていたわけでもありません。俊足のY君のことを心から尊敬していたのです。

このように競争をおして相手に対する尊敬の念をはぐくむことは、とても大事なことでと思うのですが、最近の日本では、「子供達に競争させるのはかわいそう」「勝ち負けにこだわるのは良くない」「順位によって差をつけるのは平等主義に反する」といった理由から、運動会で一位、二位、三位の表彰をやらなくなった学校もあるようです。

A 「競争は本当にいけないことでしょうか。」

日本人なら誰でも、オリンピックで日本の選手が優勝すれば大喜びし、サッカーのワールドカップで日本チームが敗退すれば悔しがるでしょう。そうやって競争を楽しんでいるわけです。それなのに、学校の運動会に関しては「平等主義に反する」という理

由で競争をさせないというのは、どこかおかしいと思いませんか？

私は、「競争のないところに進歩はない」と考えています。私の言う競争とは、足の引つ張り合いやルール違反のない、フェアな競争のことです。

「切磋琢磨（仲間同士が互いに励まし合い、競い合つて向上をはかること）」という言葉があるとおり、⑤フェアな競争は進歩の原動力です。このことは勉強やスポーツだけでなく、芸術、科学技術、ビジネス、産業、経済についても同じようにあてはまります。

B、平等主義がそんなに素晴らしいのなら、何よりも先に偏差値重視の受験競争をなくすべきでしょう。仮に「勉強以外の競争は悪」なのだとしたら、スポーツの試合も、音楽や書道や絵のコンクールも、弁論大会も、すべてその存在意義すらなくなつてしまいます。

それに、学校生活から勉強以外の競争がなくなれば、ほとんどの生徒は自分に自信を持つきっかけを失つてしまふでしょう。
C、あなたのまわりには、絵がクロウトはだしの子、音感が抜群な子、スポーツ万能な子、大人もかなわないほど字が上手な子など、何かに秀でた友達がいると思います。あなた自身がそうかもしれませぬ。

そういう人達は、たとえ勉強ができなくても、体育祭で英雄に变身したり、美術の授業でスターになったりすること、「自分には才能が（う）ソナわっている」という実感を持つことができます。そして、そういう評価を受けることによって自信をつけるのです。

こうして、努力して人から認められる喜びを味わえるだけでなく、「もうちょつと勉強も頑張つてみようかな」と、苦手分野を克服しようとする意欲を高めていくこともできるのです。

他の人と比べて、絵がうまい、音感がいい、スポーツ万能、字が上手……といったことは、どれも一つの才能であり、その人の個性です。個性に優劣はありませんが、一〇人の人にかけてこそさせれば、必ず一位から一〇位までの順位はつきますし、一〇人の人に絵を描かせれば、それぞれの作品にはおのずと違いが出てきます。その違いが個性というものです。

（今北純一『自分力を高める』による）

※注 奇抜…思いもよらないほど変わっていること。

思惑…思うところ。期待。

軸足…物事を行う際のよりどころ。

ネガティブ…否定的・消極的であるさま。

サイクル…ある変化の後、再びもとと同じ状態に戻ることに。

自我…自分。自己。

認識：物事を見分け判断すること。 同姓：同じ苗字。 概念：考え方。 イメージ。 ジェラシー：やきもち。 俊足：足が速いこと。
フェア：公平なさま。 偏差値：学力などの検査結果が、集団の平均値とどの程度差があるか数値で示したもの。
クロウトはだし：そのことを専門としていないのに、専門家が驚くほど技芸や学問が優れていること。 克服：努力して困難に打ち勝つこと。

問一 次の各設問に答えなさい。

(1) (あ) (う) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) ハツキ (い) ガイカン (う) ソナわって

(2) 「二〇人の人に絵を描かせれば、それぞれの作品にはおのずと違いが出てきます」とありますが、これを具体例とするにふさわしい四字熟語を何というか、答えなさい。

問二 本文中の **A** **C** に最もよくあてはまる言葉を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(同じものを二度使うことはできません)

ア たとえば イ だから ウ そもそも エ でも オ あるいは

問三 ①『個性』人より目立つこと』と、多くの人が錯覚しているのではないかと思えます」とありますが、筆者は、個性とは本来どのようなものであると考えていますか。解答欄の「個性とは本来、〜と考えている。」に合う形で、三十文字以内で答えなさい。

問四 ②「自分身」とは、どのようなことに心が向かう中で得られる力のことですか。本文中から二十文字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問五 ③「あなたという『個』は一人しかいません」とありますが、これと同じ内容の部分を③よりも前の本文中から二十五文字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問六 — ④「自分で決断して選んだのだから、あなたのアイデンティティの一部です」とありますが、次の1〜5について、この例としてあてはまる場合はア、あてはまらない場合はイとして、記号で答えなさい。

- 1 先生から出された夏休みの宿題
- 2 日課にしている散歩のコース
- 3 町中でばったり出会った有名人
- 4 よく着るお気に入りのシャツ
- 5 川原で見つけて拾ったきれいな石

問七 — ⑤「フェアな競争は進歩の原動力です」について、次の各設問に答えなさい。

- (1) 筆者がこのように考える理由を説明した次の文の [1]・[2] にあてはまる二字の熟語をそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

・競争をすれば、負けても相手に対する [1] の思いをはぐくむことができ、勝てば良い評価を受けて [2] をつけ、苦手な分野を克服しようという意欲を高めることもできるから。

- (2) 「競争」と「個性」との関係を説明した、次の文の [1] に入れるのにふさわしい語句を、五字以上十字以内で考えて答えなさい。

・競争によって明らかになる [1] が個性にむすびつく。

問八 筆者はこの後に続く文章で、「自分の才能の一〇分の一も知らずに死んでしまうのが人間だとしたら、『自分にはなんの才能もない』と投げやりになる前に、どんな才能があるか探すチャレンジをはじめた方がいいのではないだろうか。そうやって自分が勝負できるものを増やし、さまざまな方向に伸ばしていくことが、個性を育てることにつながるのです。」と述べています。本文で述べられた「個性」の性質と、引用文の主張をふまえて、今すでにあなたが持っている個性はどのようなもので、それをどのように育てていきたいと考えるか、百字以内で具体的に書きなさい。